

山田風太郎



柳生十兵衛

巻一

山田風太郎

柳生十兵衛死す



毎日新聞社

やぎゆうじゆうべえし
柳生十兵衛死す 上

山田風太郎（やまだ・ふうたろう）

一九二二（大正十一）年一月四日、兵庫県に生まれる。東京医科大学卒業。

旧制中学在学中より「受験旬報」誌に小説を発表。大学在学中（一九四六）、「達磨峠の事件」が「宝石」誌懸賞小説に当選、作家生活に入る。一九四九年、「眼中の悪魔」『虚像淫楽』で第二回探偵作家クラブ賞受賞。

異能の探偵小説作家として出発し、「甲賀忍法帖」に始まる忍法帖シリーズで一世風靡。近年の明治もの、南北朝ものに至るまで一貫して鬼才の名をほしいままにする。

一九九二年九月一日 第一刷
一九九二年一〇月二五日 第四刷

著者 山田風太郎

編集人 深瀬正頼
発行人 戸田栄輔

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇一五 東京都千代田区一ツ橋
〒五〇〇 大阪市北区堂島
〒一〇三 北九州市小倉北区紺屋町
〒四〇〇 名古屋市中村区名駅

印刷 精文堂印刷
製本 大口製本

落丁・乱丁本は小社でおとりかえします。

目次

山城国大河原 七

慶安の柳生十兵衛 三

剣と能 三

舍人金春七郎 翌

秘曲“世阿弥” 五

相国寺の八卦見 六

この師この弟子 六

法皇さまの葱花輦 二〇

帝なりし女人 三

対決 一四

天に沖ちゆうす七重塔 二三

室町の柳生十兵衛 二六

世阿弥と一休 二九

魑魅魍魎ちみもうりようの金閣寺 一九

太平記を詠よむ幻術師 三〇

故山の劍俠 三三

山城柳生さんじよういろり咄ばなし 三三

呼ぶ声 三五

朝あしたは山中暮には市中 三六

後南朝党 三八

神器盜じんぎとり 三三

陰流恍惚劍かげりゅう 三五

母鳥子鳥はどりこどり 三六

魔天まてんにかける罨わな 三九

風蕭々かぜしょうしょう 三二

柳生十兵衛死す

上

山城国大河原やましろのくに

一

そのころの呼びかたで、山城国相楽郡大河原は、木津川の上流、山城と大和と伊賀の接点にちかいところにあつた。

すぐ西に、そのむかし後醍醐天皇が落ちられて、はじめて河内の楠木正成を召し出されたという笠置山があるが、それをふくめてこれといった高山はないけれど、南も北も山波が重なるなかを、ゆうゆうとながれる木津川が、黒味をおびた藍の色をたたえているのは、やはり山の翳をうつしているからであらう。

もつともその日、この一帯には低い雲がたれさがつていた。晴れているなら、花の季節はすぎたけれど、花より美しい新緑が山にかがやいているだろうに、その山も河も墨色にけぶっている。それどころか、銀色の雨さえときどきわたつてゆく。

そのせいか、一帯に人影らしいものはない。

河の兩岸には、奈良と伊賀をむすぶ細い街道が通り、せまいながら田畑さえあるのだが、人影はおろか、ふしぎに飛ぶ鳥、舞う蝶さえ見えない。

この茫々とした薄墨の風景には、死の世界の——というのが大げさなら、少なくとも幽玄の世界の静寂がしんとみちていた。

東のかなたに、河をはさんで大河原の村落が、南と北、そのどちらにもかやぶき屋根が七、八軒、わびしくかたまっているのだが、そこにも人の動いている気配はない。

——と見えたが、やはり人はいた。

午後だ いぶすきたころ、北側の集落から、蓑笠をつけた農夫らしい二人の男が出てきて、もう葉をしげらせている猫柳のかたまりのなかをぬけ、河原へ下りていった。川ぶちに一艘の舟がつかないであり、それで対岸へわたるつもりであつたかも知れない。

鳥影は見えないが、黒い雲の上から、カア……カア……と、しきりに鴉が鳴く。

このあたり河は、声はりあげれば向う岸にとどくほどの幅だが、大河原という地名が示すように、芦のはえたひろい河原があり、あちこち白い砂洲のような地形も見える。

と、二人の農夫はふと立ちどまって、前方に眼を釘づけにした。

そこにだれか倒れているのに気がついたのだ。

二人は顔を見合わせ、おそろおそろ近づいていった。そして、倒れている人間を見下ろした。

「……殿さまでねえか！」

「柳生の殿さまじゃ！」

静寂の世界に、はじめてあがつた怖ろしい声であつた。

二人は、泳ぐような腰つきで街道に逃げかえり、西へ——三里ばかりの柳生ノ庄のほうへ、こけつまるびつかけていった。このあたりは、南北朝のころから柳生家の代々支配する土地であつたのだ。

数刻後、その柳生ノ庄の方角から、五、六騎の武士が砂塵をあげて走ってきた。

二

武士たちは、泡をかんでいる馬を街道の立木につなぐと、つんのめるように河原へすすんでいった。

むろん領主の家来にちがいない。しかも農夫の急報でその領主の横死を告げられて、かけつけてきて、めざすものを見いだしたのに、そこへまろびよらず、五、六歩の距離で凍りついたように立ちすくんだ。

それはあまりに怖ろしいものであったからだ。

砂の上の人間は、ぬきはなつた刀身をにぎっているが、あおむけに大の字になつている。だから、月代をのばしたその脳天から鼻ばしらにかけて、絹糸のような刀のすじがあきらかに見えた。それまでいくどか時雨しぐれのようにわたつていった雨のためであらうか、顔にはほかに血のあととはなかったが、まわりの砂を染めた血はもう黒ずんで凄じすさまい。

そして片手につかんだ刀身もまた血ぬられていた。

「殿じゃ！」

ひとり、やつとうめいた。

そう声に出して確認しても、なおだれも異次元の魔界にいる気持でいる。

雲は暗々とたれさがっているのに、その白洲をとりまくようにながれている河のせいか、地上には蒼味をおびた光がただよっている。その光に浮かびあがった死者の顔は、なんとどこかうすら笑いを浮かべているようではないか。……

息を三つほどついて、またひとりが絶叫した。

「こんなことが、この世にあり得るはずがない！ われらの殿、柳生十兵衛さまを、かくもみごとに斬って去った者は何者か？」

まさしくその死者は、この柳生ノ庄のあるじ柳生十兵衛であった。

そして、それを見つつ、家来や門弟の頭を颯風のごとく吹いているのは、なぜ？ いかにして？ という疑問より、まず相手は何者か？ という彼らにとつて信じられない怪異であった。が、柳生十兵衛の刀はたつぷりと血ぬられているのに、その相手の姿はどこにも見えない。

突然また別の一人が、名状しがたい声をあげた。

「あのお目を見い！」

指さした腕が、ワナワナとふるえている。

「殿の、ただひとつのお目がつぶれて、ひらかぬはずのほうのお目がひらいておる！」

みな見いて、天地晦冥の顔を見合わせた。……

ああ、彼らの信ずるところによれば、当代最強の剣人柳生十兵衛、それを斬った人間は果たしてどれか？

以下は、この顛末に至る物語である。――

慶安の柳生十兵衛

一

慶安二年十一月はじめのある午後だ。

柳生ノ庄、正木坂をのぼった丘の上にある柳生陣屋に、深編笠、ぶつさき羽織、どんすの袴はかまの旅姿の武士たちがおとずれた。七人であった。

もっともそんないでたちは三人だけで、あとは若党らしいが、三頭の馬をひいている。武士の一人は、鞆たもとをかけてはいるが、槍やりまでついていた。

坂の上に門がある。その外で、武士の一人が、

「これは浪人ながら、江戸の牛込ウシゴ榎坂に軍学の道場をかまえる由比正雪と申すものと、その門弟でござる。紀州への道すがら、はからずもご当地を通行いたすこととなり、かねてよりご当主の柳生三厳あつむさまのご高名に敬意をいだく者としてごあいさついたしたく、なにとぞお目どおりのほど願ひあげまする」

と、門番に申しこんだ。

浪人と名乗ったが、その行装のものしさに眼を見張った番人の一人が、あわてて注進にかけ去ったあと、彼らはひとかたまりにたたずんで、そこから見下ろせる柳生谷の眺めに眼を投じている。

北と南につらなる山は低いが、それにはさまれた柳生ノ庄は、あきらかに山峡の国だ。これを一国と呼び、ちんまりとした集落を城下町と呼ぶのは可笑しく思われるほどだが、紅葉黄葉に彩られ、あちこち鈴なりの柿の実をそのまま残した風景は、それなりに美しい牧歌的な小世界を作り出していることは疑えなかった。

「よくこんなところが、剣のふるさとなどいわれるような国になったものじゃな」

「五街道でもないこんなへんぴな土地へ、天下の剣人がおとずれるという。——」

「ま、天下の一奇蹟といつてよいかも知れんな」

「とにかく石舟斎、但馬守、そして十兵衛三藏と、名人が三代つづいたのじゃからな」

門弟らしい二人の武士は、ひそひそと話し合った。

「とはいうが、先代、先々代の二人はともかくも柳生家を將軍家指南番、一万二千石の大名に仕立てあげたのじゃから、その実力は認めざるを得んじやろうが、いまの十兵衛はその將軍家指南役から放り出されて、この山国にひっそくしておるのは、どういうわけか」

「あの木立ちの向うに見える大屋根が音にきこえた正木坂道場と思われるが、べつに稽古の声もきこえんではないか」

「見ろ、この城門の瓦はおち、汚れ、門の軒下にもクモの巣が張っておる。——」

二人は、じろじろと城門の内外を見まわした。

もう一人、これが頭分かしらだろうが、深編笠のなかでしずかにいった。

「じゃから、柳生十兵衛なる人間を物見ものみにきたのではないか」

そこへ、門番といつしよに顔を出したのは、十六、七の愛くるしい少女であつた。

「殿さまはお庭のほうにおられますが、それでおよろしかつたら、どうぞ」

と、いった。

どうも大名を訪ねたようではない。その少女だつてべつに腰元風ではなく、それどころか切下きりさげ髪にもんべという、いま城下の村で見かけた娘たちと変らぬ、素朴な、野の匂いのする身なりなのである。

彼女は、訪問者たちを門内へまねき入れた。

馬と若党たちを門外に残し、正雪ら三人は、城内のだらだら坂を少女に案内されてゆく。

さすがに、次の門のところで深編笠をぬいた。

正雪は髪を総髪にして、羽織ひもを紫にむすび、軍扇ぐんせんを持ち、威風堂々とした人品だ。槍を立て歩いて四十几歳の男は、豪快きわまる顔をしている。もう一人は、せいかなながら、どこか軍師めいた感じのする人物である。

歩いてゆく道の片側には、瓦をのせた白い土塀どべい、または長い石垣など、さすがに城らしいところもあるが、しかし正しくはとうてい城とは呼べない。むろん天守閣などは無い。これは陣屋と呼んだほうがふさわしいだろう。

その土塀もあちこち剝はげ、瓦にはペンペン草がはえ、石垣は崩れている。侍の影など、どこに